# 和訳『セイロン餓鬼説話』

## ―<下>―

片山一良

Ⅰ はしがき
Ⅱ 和訳
(9) 第十九話 僧財乱用説話 (Saṅghasantakapamatta-vatthu)
(10) 第二十話 幼樹比丘説話 (Taruṇabhikkhu-vatthu)
Ⅲ 「セイロン餓鬼説話」について

---

## Ⅰ はしがき

本稿では前回に引き続き，『セイロンの説話』第二章に収められた残りの二話を和訳し，そのまとめとしてセイロンにおける餓鬼について若干考察しておきたい。

今回ここに収める二話は，これ迄の八話に比べて餓鬼説話としての特徴にいくぶん欠けるもので，物語の中にはいわゆる餓鬼が登場しない。罪を犯した人間がいづれ餓鬼世界に落ちるであろう存在として，いわば人間餓鬼 (manussapeta) 的に現われるに過ぎず，餓鬼が或る姿をして語りかけてくるような描写は何もない。つまり前八話は餓鬼の現在物語，後二話は過去物語とでもいうべきものである。従ってこの二話を餓鬼説話として扱うことに聯か戸惑いを感じるが，ともかく第二章に含まれるものでもあるし，関連説話としての内容は備えているから，ここに和訳を試み，他との比較資料の便に供したいと思う。

本和訳の底本は次の通り。

*Sīhaḷavatthupakraṇa* (C$^{e}$), ed. by A. P. Buddhadatta, Śrī Laṅkā 1957, pp. 57～62

尚，和訳上の注意は前回の通りである。

# II 和　訳

## (p.57) 第十九話　僧財乱用説話

次のように伝えられている。

スラッタ（Suraṭṭha）地方のすばらしい高地にあるアーラーラバーラ（Āḷārabāla）町*のポーリマーシー岸辺に、コンダプーディ（Koṇḍapūdi）精舎があった。その精舎では筆頭比丘が権力（issariya）を振い，その精舎を勝手にとり仕切っていた。

彼は死時が追った時，悪病に罹った。医者は彼を見ると，

「この比丘には水を与えてはならん。与えると病気が広がるばかりだぞ」といって，看病者たちを追いやった。看病者たちは「分かりました」と言って水を与えないでおいた。

夜半，彼は水が得られず，渇きに悩まされ，その苦しみに勝てず，自ら起き上って自分の水瓶（karaka）を取った。が，それは空（rittaka）になった。そこで部屋を出て用水瓶（paribhogaghaṭa）に触れた。しかしそれも空になった。そこで出て行って水壺（pānīyacāṭi）に触れた。が，それもまた空になった。池に行って触れると，それもまた空になった。そこで出かけて行って，ポーリマーシー（porimāsī）川を見た。すると，それも空になってしまった。彼は水の無いその乾き切った川を渡って考えた。

〝自分には功徳の報いが無いから，どこでも水がなくなってしまうのだ。必ず自分は死んでから餓鬼の世界に行かねばならない。この前兆（pubbanimitta）が自分にははっきり見える。夜が明けてから話してみても，自分のことを比丘たちは信じてくれないに違いない〟と。

そこで自分の浴衣（nahāna-sāṭika）を対岸の木に結び付け，再び帰って彼は部屋の中に横たえた。夜が明けると，彼は比丘たちに呼びかけて，そのすべてを語った。

1　「友よ、ここなるわしは夜に　渇きの苦に悩まされ
　　その苦に勝つこと出来ぬため　とうとう家（ālaya）から出て行った

2　家を出かけて行った後　渇きのために夜半になって

わしは水瓶に触れてはみたが　水を得ること出来なかった

3　同じように食べ物や　水の壺もそしてまた
触れただけでことごとく　空(から)になってしまったのだ

4　光り輝き清涼の　澄んだ水は何も無く
水に満ちた池もまた　空(から)になってしまったのだ

5　キラキラ輝く砂生じ　いつも流れているばかり
〔ポーリマーシー川もまた〕空(から)になってしまったのだ

6　その川を渡り岸辺において　立つとわしはその時に
宗教心のあるものとなり　すぐさまこのよう考えた

7　まことに不思議なしたる業が　苦しみの報いを与えるものとは
〔わが罪によりこのわしに　こうした業が現われたのは〕*

比丘たちは信じまい。結びつけられた衣を持って来て，疑惑を解くがよい」

8　彼の言葉を聞き終り　一人の明眼ある比丘が
その川を渡り行き　浴衣を持って帰って来た

9　するとそれ見て〔かの比丘たちは　宗教心のあるものとなった
彼比丘は〕比丘らの真中で　次の言葉を述べたのだった

10　「僧団の利得がどのように　多かれ或いは少なかれ
その利得の一切を　わしが自由に(issariyaṁ)してしまった

11　『この者にはこれだけを　そのような者にはこれだけ与えよ
少し与えよ多く与えよ　与えるな』といい遮った

12　このよう自由に振舞って　僧団の財を与えてしまい
欲しいままに自分自身の　財産のように施捨をした

13　わしをよく見てそなたらは　みな僧団の財を恐れよ
恐れをもって怠けずに　仏教のもとに努力せよ

14　努力し励みそしてまた　不死の句（amata-pada）を修習すれば
法愛（dhammapīti）　比丘に愛される　法をきっとそなたらは得よう」

15　このよう彼は自らの　苦を比丘たちに告げ知らせるや
そこで息を引きとって　そのまま餓鬼の世界に行った

**僧財乱用餓鬼説話第十九**

## (p.59) 第二十話　幼樹比丘説話

次のように伝えられている。

よく富んだ人々で栄え，常に穀物が豊かにそなわり，優れた比丘が多く，忍耐と安楽をすみか（nivāsa）とし*，十方に知れ亘った有名な，いつでも楽しく，敬虔な信者衆に奉仕されたスラッタ（Suraṭṭha）地方の名だたる村において，民家（gāmâvāsa）の近くに，或る若い比丘（taruṇa-bhikkhu）が住んでいた。「夜通し怠けて暮らす比丘」（pamādavihārī sakalarattiyābhikkhu）という名を持つ彼は，露骨な行為を行ない，本能的な罪（pākaṭa-padosa）を犯すもの〔であった〕。

このようにして暮らしているその比丘の愛人（bhariyā）は妊娠してしまった。胎児が熟すると，彼は彼女をお産のために母親の家(mātughara)へ連れて行った。ところが彼女は，途中の或る茂みの中でお産をしたのであった。血にまみれ，悪臭が漂い，異様になった彼女を見て，彼は驚怖し，恐れ戦き，厭逆想（paṭikkulasaññā）を起こして考えた。

1　皮（taca）だけにより覆われて　屍虫の類（kiṁkulākula）にまつわられた身の
　内面を私は見ることをせず　外面だけで楽しんでいた

2　下は足の裏から　上は髪の毛先まで
それは垢に汚れ満ち　不浄で悪臭あるもの（pūtigandhika）だ

3　髪，毛，爪，歯そしてまた　皮なるこれら五種および
　この身体（sarīra）を捨て置いて　心（mano）は愚かに楽しんでいる

4　今ここに真実(まこと)から（bhūtato）　私は臭い世界の内（antopūtigati）なる
　血，関節液（lasikā），肉を見る　まるで牛の屠殺場（āghātana）のよう

5　厭わしくあれ！実にこの　厭うべき価値のない
　すべての智者に慎まれ　すべての愚者が歓喜する身（kāya）に。

6　そのような臭い身体を　私はかつて楽しんだ
　心が顚倒したために　貪欲に負け迷い乱れた

7　勝者の教え（jinasāsana）を得ておりながら
　私は悪い生活をした
　この私は戒を無視し　これらの腐敗を楽しんだ
8　怠惰にふけった私の　周囲をきれいに飾った後
　再び出家の生活（pabbajjā）を得て　私は教えを完成させよう
(p.60)　9　私は煩悩，貪ぼり，怒り　〔汚れ〕などに染汚されたのだ
　正法の渡し場（saddhammatittha）に行って　その垢を洗い清めよう
10　このよう彼は考えて　気持を強くした後で
　怖畏（saṁvega），恐怖（bhaya），驚怖（santatta）し，出家しようと決心をした

彼はこのように考えて不浄想（asubhasaññā）を心に念じて，その女性を母親の村へ連れて行った。そして戻ってから，チッタガ（Cittaga）という精舎のあるそのところへ行った。するとその精舎にはシッガヴァ（Siggava）という名前の六神通をそなえた長老が住んでいた。その長老に近づいて出家することを頼んだ。

11　煩悩に執われ仕えられた　恐ろしい輪廻の流れ（saṁsārasota）の中に
　四暴流（caturogha）によって運ばれる者を　法の船でお救い下さい
12　輪廻の暴流を渡りつつあり　束縛の中に横たえた私の
　束縛を断ち切るために　師の法を私にお授け下さい
13　貪ぼり，怒りの火によって　長い間渡っている
　光熱の消えることの無い　私に法水（dhammapāniya）お授け下さい
14　病い（vyādhi）からお救い下さって　煩悩（pariyuṭṭhāna）に罠をなさるお方は
　煩悩（kilesa）に食い侵されている　私に法薬（dhammabhesaja）お授け下さい
15　庇護者はおらず哀れなる　地獄に落ち行く人間の
　私を　主（nātha）よ，お救い下さい　お慈悲の心をおもちになって

16　私は罪（accaya）に犯されました　〔怠惰の虜になった私のため〕
　その一切を耐え忍ばれて（adhivāsetvā）　主よ（vibhū），わが出家をお認め下さい

このように彼に乞われたその長老は，彼を出家させた。

その長老はまた同情する者（anukampamāna）となった。〔これが将来，アラカン果（arahatta）のための強い原因（upanissaya）となるだろう，と。彼は出家した。〕そして森の樹の下において伴侶もなく独りで暮らし，努力し励んだが，特別これといって得ることもなく，凡夫（puthujjana）のままで，間もなくして死んでしまった。その後，そこにあった〔樹の枝に化生した（opapātika）幼児〕となって生まれたのであった。或る比丘が彼を見つけて抱え上げ、チッターバ（Cittābha）長老のところへ連れて行った。長老は見て，「これは幼児だ。この者は幼樹の比丘(taruṇa-bhikkhu)だ」と知って，その比丘に次のように言った。

17　この幼児をこの住房（leṇa）に　置いて養育してほしい
　この者は大聖(mahāvira)，禅定者(jhāyin)　六神通者*　となるだろう

18　すべてのお経（āgama）を飲み干して　教えを証得した後で
　それらによって法義（dbammattha）に巧み　聡敏で自信ある彼は

19　異教（paravāda）を破り　多くの外道を砕破し
　正法の指導者（dhammanetti）を輝かせ　多くの者を出家させるだろう

20　お産で血にまみれた女性を　一度彼は目にするや
　宗教心を獲得し　その果を得るに違いない，と

比丘は長老の言葉を聞くと，幼児を房（ovaraka）に置いて育てた。

このようにして彼は成長し、7才になると長老のもとで出家して、アラカン果を悟った。六神通者、四無碍解（catupaṭisambhidā）を得た者となり，すべての仏の教えを証得したのであった。

彼はチッターバ長老が般涅槃すると，多勢の比丘の師となって，命の限りを尽くし，そして般涅槃した。

彼は般涅槃の時，七ターラ樹（tāla）の高さにまで空（vehāsa）を昇り、

空中（antalikkha）に坐って，次の詩を唱えたのであった。

22　「仏と法と僧とにおいて　更に道（magga）や行道（paṭipadā）において
もしも疑問があるならば　望みとあれば問うがよい」

22　「仏と法と僧とにおいて　更に道や行道において
私どもに疑問があります　あなたがかつて作された業は何」

彼は空中に立って答えた。

23　「わしはかつて破戒の者で　沙門としての名を持っていた
わしはスラッタの地方において　怠惰にふける者であった

24　わしの罪過（dosa）は露骨な行為　全くよく知られたものだ
功徳（puñña）ではなく生活（jīvika）のために　勝者の教えの下に出家した

25　このようわしは出家して　教えの下で生活をした
誰もわしを比丘中の　障碍（kaṇṭaka）であると認知した

(p. 62) 26　怠惰に暮らすこのわしの　愛する者が妊娠をした
お産をしている彼女を目にし　わしに愛欲による恐れが生じた

27　それ故，輪廻を恐れたわしは　チッタガ*山に行ったのだ
再び出家をしたわしは，森において心喜んだ

28　そこで生命尽きた後　化生の者となったわしは
人間の幼児の姿して　樹枝（viṭapa）の中に生まれたのだ

29　わしを見つけて或る比丘が　チッターバのところへ連れて行った
チッターバ長老に見せた後　同情の者が育ててくれた

30　思慮分別がつく頃わしは　彼のもとで出家した
出家した後，わしはすぐ　アラカンの果を得たのであった

31　沙門たる（sāmaññna）に相応しい　わしは受戒（sīlasamādāna）を得たのであった
その瞬間に宗教心を得　わしにこの果が得られたのだ

32　厭離すべきものへの畏れ　かかるものこそ大果である
それゆえ世の智者たる仏陀は　称讃される得難いお方だ」と。

33　このようにして聖なる　その長老は空中（ambara）に坐り
自ら作した業および　業の報いの説明をした

34　彼は法王の教えの下に　法を愛する比丘のため
　　浄い心が生起する　この法道（dhammamagga）を修習して
35　かく多種にして　多様の罪道を
　　かく自在神力により神変（pātihera）を　立（thita），臥（sayana），
　　坐禅（nisajjā），〔経行（caṅkama）により
　空中路にて説明をした〕　まるで生物の主*のように

このように自在者の彼は神通力を明らかにした後，般涅槃したのであった。

それゆえ，わずかであっても宗教心（saṃvega）は徳（guṇa）をもたらすものとなるのである*，と。

**幼樹比丘説話第二十**

## Ⅲ　「セイロン餓鬼説話」について

『セイロンの説話』（*Sīhaḷavatthupakaraṇa*）[1] 第二章に収められた十の説話は「餓鬼」（peta）の話だけをまとめたもので，セイロンを背景とするものとしては珍しい。この類は，パーリ文献の『餓鬼事経』（*petavatthu*）とか，サンスクリット文献の『百喩経』（*Avadāna-śataka*, Nos. 41～50）などに見られるに過ぎない。インドの preta という観念がセイロンではどのように受けとめられているかを見る上で，非常に興味あるものであると言うことが出来よう。

二回に亘って訳出した十のセイロン餓鬼説話を分析し，この説話並びに餓鬼の特殊性[2]を若干探って本稿のまとめとしておきたい。

十の説話を再掲すれば以下の通り。

No. 11　マハーデーヴァ信士説話（Mahādeva-upāsakassa vatthu）……ニッサダナ（Nissadana）地方話
No. 12　岩山餓鬼説話（pāsāṇa-petavatthu）……ローハナ（Rohana）地方話
No. 13　石柱餓鬼説話（Thambha-petavatthu）
No. 14　耕田餓鬼説話（Kasi-petavatthu）
No. 15　米餓鬼説話（Taṇḍula-petavatthu）……支提山（Cetiyagiri）話
No. 16　食障碍餓鬼説話（Bhattantarāyakara-petavatthu）……ローハナ地方

話

No. 17　旗餓鬼説話（Patāka-petavatthu）……ローハナ地方話

No. 18　軛牛餓鬼説話（Balivadda-petavatthu)……ラーマンニヤ（Rāmaññа）地方話

No. 19　僧財乱用説話（Saṅghasantakapamatta-vatthu)…スラッタ(Suraṭṭha)地方話

No. 20　幼樹比丘説話（Taruṇabhikkhu-vatthu）…スラッタ地方話

これらの説話を分析するために，餓鬼説話のⅠ．個別構成，Ⅱ．全体構成という二区分を立てて見ることにしよう。

## Ⅰ　個別構成

餓鬼についての話はどの場合も大体同じような形成で述べられている[3]。ここでは説話の構成要素をより明らかにするために，餓鬼の

(1)現在の姿（受苦の相）(2)住所（行方）(3)期間（受苦時間）(4)過去の姿（前世の身分）(5)過去の業（受苦の因）(6)解放の条件　(7)供養者（施主）(8)解放後の姿 (9)反省（教訓）

という九項について検討したいと思う。

(1)現在の姿

Nos. 19—20 を除き，他はすべて哀れな餓鬼が現われる。飢と渇に悩まされ，身は火に焼かれ，悪臭が漂い，しかも醜く，骨と皮だけに覆われている，といった『餓鬼事経』などにも見られる一般的な餓鬼の特徴をとっている。しかし，その姿は手，足，頭をそなえた1コーサ（kosa）もある大岩山のような餓鬼（No. 12）とか，岩にはめ込まれた半身の餓鬼（No. 13）が見られるが，これらはセイロンのいたる所に目につく驚く程大きな岩や石がそのモチーフになったものであろう。また，鋤をつけて田畑を耕す牛のポーズをしたもの（No. 14）或いは四足の動かない軛牛の姿をした餓鬼（No. 18）も登場するが，これもこうした話がすべて素朴な農耕文化圏の所産であることを物語っている。千重の鉄布を身につけて焼かれる餓鬼（No. 17）が食も坐も臥もなく更に「私には死がありません」（maraṇaṁ me na vijjati）と嘆くのは，これがまさに輪廻の絆を断つことの出来ない五道または六道中の餓鬼であることを示している。

(2)住所

餓鬼として落ちる所，住む所は餓鬼世界（petaloka）或いはヤマ世界（yamaloka[4]）であり，また同じくその行方ということで餓鬼道（petagati）でもある。いずれも表現が異るだけで，ここで意味するところには変りがない。Nos. 11—19にはそのいづれかで表現されている。ただし注目すべきは，そのうちの Nos. 12—14, 18で，この四話には，餓鬼が餓鬼世界で悪業の報いを受けた後，更に無間地獄(avīci, avīci-niraya)に行くとある。これは流転して地獄（niraya）に行き，また餓鬼世界（petaloka），畜生界（tiracchānayoni），更に人（mānusa），天（saggakāya）の世界へと行った，などという場合[6]の方向とは逆の道をとっている。これより五道輪廻のサイクルには業に応じて上昇する方向と、下降する方向の二面があることが知られる。またこの四話では，或る罪を犯した者は岩だとか牛の姿になって餓鬼世界で苦を受け，その後，無間地獄へ行くというが，これは，罪を犯して生前に人間餓鬼（manussapeta）となり，死後，地獄に生まれると記述する『ジャータカ』[6]などの場合とは異なる。また No. 19 の場合も悪業をなした後，人間餓鬼的になるが，死後はやはり餓鬼世界に行っているのであって，『ジャータカ』と違っている。セイロン餓鬼説話では，悪業の人は，生前，餓鬼であろうとなかろうと，死後はまず餓鬼世界に落ち，その後，地獄に行くというコースをたどるのである。尚，No. 20 には死後の行方が示されていないが幼樹として再生する身であることが記されてあるのは，一般に再生後の姿は成長した存在であるという例[7]にあてはまらぬものである。

(3)期間

餓鬼が餓鬼世界において苦を受ける期間についての記述があるのは Nos. 12—14, 18であり，他には見られない。即ち，餓鬼世界で苦を受けた後，残余を無間地獄で受けようとする餓鬼についてのみ言われるものである。例えば，岩山餓鬼（No. 12）は餓鬼世界でカッサパ仏からゴータマ仏迄の(その間に大地は七ガーヴタ増大した）無数年（asaṅkhya）の間過し，その後無間地獄へ行ったし，また石柱餓鬼（No. 13）はカクサンダ仏からゴータマ仏に亘る四仏陀の（その間に大地は四ヨージャナ増大した）無数年の間を，耕田餓鬼（No. 14）も無数年間，更に軛牛餓鬼（No. 18）もカッサパ仏からゴータマ仏の無数年間をヤマ界で過して，その後無間地獄へ行ったのである。その場合，餓鬼が餓鬼世界で苦を受けていた時，ちょうどゴータマ仏が世の導師として現われたというわけで，それより七日後にいづれも無間地獄に行くという筋書である。このことが一体何を意味するものであるか

明らかではないが，これら四説話の他と異る大きな特徴であると言えよう。

(4)過去の姿

No. 11 を除く他の九話には餓鬼の前世の姿について記述されているが，その中の五話はかつての姿が僧団の有能な比丘であり，三話は地主と農夫，残りの一話は刀剣作りである。これを見ると，説話が形成された頃の，或いはそれ以前の僧団には比丘の破戒が余程多かったと見える。それもかつて有能と認められたり，筆頭比丘であった者の犯戒であり，当時の僧団の堕落ぶりなのか，でなければこうした話を収録しなければならないように敵対する何らかの要因があったのか，いづれにしても僧団がただならぬ状態にあったことが想像される。が，それは別として，かつて多聞博識であり具戒者であった比丘の犯行は，以前の善行が加味され，そのため罪(受苦)が軽減される (No. 15) というのは，いかにも世間的レヴェルの解釈で面白い。

(5)過去の業

この項目は餓鬼説話を成立させるための不可欠の要素であり、十話すべてが有するものである。その他の項目は殆んどが話の内容に応じて省略されている。このことは当然のことながら、餓鬼そのものが過去の業によって作り出されることを意味しているのである。今この過去(前世)の業を順に掲げれば次の通り。

吝嗇 (No. 11)，僧団所有の土地，穀物，財物を使い果したこと (No. 12)，僧団の土地を荒す違反 (No. 13)，師（カッサパ仏）への暴言 (No. 14)，寺男から借りた僧団の米を返し得なかったこと (No. 15)，外来比丘の食を中断させたこと (No. 16)，大塔から風に飛んで来た旗を隠し取ったこと[8] (No. 17)，うそつきの村人として，また比丘たちの生活の場所を乱したこと (No. 18)，筆頭比丘として権力を振い，僧団の財を使い果したこと (No. 19)，比丘でありながら愛欲生活に耽り、子供を産ませたこと (No. 20)

このうち Nos. 12—14，18 は破僧伽，または師への暴言ということで特に罪は重く，いづれも餓鬼鬼世界で苦を受け，更に無間地獄に行くことが述べられている。もちろん Nos. 19—20 も大罪であるが，話が餓鬼の過去物話であるため，そうした記述は見られない。

(6)解放の条件

この条件には，餓鬼によって「これこれをしてお助け下さい」と言われたことに対し，供養者が飲食物などを比丘，または僧団に捧げ，そこで「この報いによ

って餓鬼にこれこれのものが生じよ」と説戒される直接的なものと，比丘が自ら「仏，法，僧に供養してあげようと」と言ってなされる間接的なものとの二種がある。話の中にはこの条件が示されている場合と，示されない場合とがある。示されているのは，餓鬼がその世界に落ちている場合（Nos. 11, 15, 17）であり，示されていないのは，餓鬼がその世界にいながら後に無間地獄へ行く場合（Nos. 12, 14, 18）と，話の要素としてのこの条件が全く省略されている場合（Nos. 16, 19, 20）とである。原則的には餓鬼が解放を願うその条件が示されるのは餓鬼世界に落ちてそこだけに住む場合であり，示されないのは餓鬼が餓鬼世界から更に無間地獄に行く場合である。餓鬼解放のための供物は餓鬼に直接ではなく，比丘（8人）を通して施されることが条件となっており，その功徳によってはじめて解放が行なわれるという。

(7)供養者

これは餓鬼解放のために供養する者であり，それは餓鬼の親族でも非親族でもよいという[9]。ここには広い意味で，解放の条件を直接満足させ叶える者（Nos. 11, 15, 15）と，解放そのものをさせることは出来ないが餓鬼の話を聞いたり（Nos. 13—14, 16—18），手助けをする者（No. 12）とがいる。前者の解放を実現させる者には信者と比丘との二種がおり，また実現させる方法（手続き）には次の三種が見られる。

①信者 $\xrightarrow{\text{飲食物}}$ 比丘…→解放（No. 11）

②行乞比丘 ⟶ 王 $\xrightarrow{\text{米}}$ 僧団…→解放（No. 15）

③行乞比丘 $\xrightarrow{\text{旗}}$ 塔…→解放（No. 17）

むろんこのパターンは供物（換言すれば罪の内容）に応じて制限されよう。

(8)解放後の姿

餓鬼の状態，或いはその世界から解放されると，天の容色（dibbavaṇṇa），天の状態（dibbattabhāva）を得たり，天の姿（dibbarūpadhāri）になって天子（devaputta）となる。それは高貴な羽毛を持ち，美しい衣装や飾りを着け，芳香があり，全身は黄金色に輝き，まるで三十三天のようだと言われる。餓鬼を脱出してこの一段レヴェルの高い天子を仏典には yakkha と呼んでいる場合もあるが，ここではそのような表現はない。この姿をとるのは，Nos. 11, 15, 17 の三話においてのみあって，他には見られない。

(9)反省

餓鬼がかつて作した自らの業を恥じ，嘆いて反省するのは(5)の過去の業と共に餓鬼説話の中で最も重要な項目である。どの話にもこの反省が見られる。このセイロン餓鬼説話では，No. 11 を除くすべてが比丘に対する訓誡であり，またその内容は殆んどが過去に自分が犯した罪をくり返さぬよう忠告し，更に怠けることなく努力精進することが強調されている。

## Ⅱ　全体構成

以上、個別的にこの餓鬼説話を検討したが，この結果に基づいて，全体の構成を考えてみよう。

これ迄に見たところでは，(5)と(9)とがどの説話にも含まれる要素であることが分かった。つまり，「過去の業」と「反省」との二項目は餓鬼説話を構成する最も重要な部分である。一方それゆえに，各説話の特徴を調べる上にはこの二項目を使用することが出来ない。そこで残り(1)—(4)，(6)—(8)の七項目によって調べることになる。

まず，(6)—(8)から，全体は大きく Nos. 11—18 と Nos. 19—20 とに分かれる。前者は現に餓鬼世界に落ちている餓鬼の現在物語であり，後者は餓鬼世界に落ちる前の（人間餓鬼の）過去物語である。

次にそのうちの現在物語がまた区分される。即ち，(2)—(3)によって Nos. 11, 15—17 と Nos. 12—14, 18 とに分類される。前者は餓鬼が餓鬼世界にのみ住むことを説く物語であり，後者は餓鬼が餓鬼世界に住んだ後，更に無間地獄へも行くことを説く物語なのである。この(2)—(3)の項目はまた(6)—(8)の項目に関連している。なぜなら餓鬼世界にだけ住む餓鬼の物語には(6)—(8)は欠かせぬ要素であるが，更に地獄へ行く餓鬼の物語にはこの要素は何の意味をも持たぬから。

残る(1)，(4)の項目からは，各説話の間に見られる構成上の特徴が出て来ないが，物語全体の社会的，文化的背景がこれから浮かび上って来る。それはⅠにおいて既に見た通りである。

以上のことをまとめると，このセイロン餓鬼説話の全体構成は次のようになる。

- セイロン餓鬼説話（Nos. 11—20）
  - A. 餓鬼現在説話（Nos. 11—18）
    - ①餓鬼世界に住む餓鬼の話（Nos. 11, 15—17）
    - ②餓鬼世界から無間地獄へ行く餓鬼の話（Nos. 12—14, 18）
  - B. 餓鬼過去説話（Nos. 19—20）

これはまた次のような要素から成る三つの形式で表わすことが出来る(番号のみのものはその項目が欠けていることを示す)。

A①構成：(1)現在の姿——(2)住所——(3)——(4)過去の姿——(5)過去の業——(6)解放の条件——(7)供養者——(8)解放後の姿——(9)反省

A②構成：(1)現在の姿——(2)住所——(3)期間——(4)過去の姿——(5)過去の業——(6)——(7)——(8)——(9)反省

B構成　：(1)現在の姿〔但し，人間餓鬼の姿〕——(2)——(3)過去の姿——(4)——(5)——(6)——(7)——(8)——(9)反省

このようにセイロン餓鬼説話は三形式から成るが，ここに現われる餓鬼はいづれも殆んどが業の報いに従って具体的な姿を持ったもので，それは餓鬼世界，もしくは更に無間地獄に行って苦しみ輪廻にさまよう餓鬼である[10]。

注

1）本書は，「はしがき」にも示した通り，A. P. Buddhadatta により1959年に始めて刊行され紹介されたもので，未だどの国にもこの全訳並びに研究は行なわれていない。わが国にはつい最近，招介されたに過ぎない。橘堂正弘「*Sīhaḷavatthupakaraṇa* について(一)」(『印仏研』第18巻第1号，昭和44年)，森祖道「*Sīhaḷavatthupakaraṇa* について」(『印仏研』第21巻第1号，昭和47年）等参照。

2）拙稿「peta に関する若干の問題——セイロンの場合——」(『宗教研究』第218号，昭和49年）参照。

3）宮島菱道「餓鬼について」(『宗教研究』第13巻，昭和11年)，奈良康明「死後の世界——アヴァダーナ文学を中心として——」(『講座仏教思想』第7巻84頁以下，理想社，昭和50年）参照。

4）もともとヤマ（閻魔）は人々の父，父祖の主，preta（死者）の王であるところから，その世界が peta（餓鬼）の世界と混同されたものと思われる。cf. *PV*. Ⅰ. 11, 9; Ⅱ. 8. 2 cte. 尚，奈良前掲論文 p. 85 f. 参照。

6）*Thag*. 258. etc.

7）*J*. Ⅰ. 238, Ⅲ. 72 etc.

7）奈良前掲論文 p. 77 f.

8）cf. Vism. 63

9）これは「説戒して施して下さる方は、親族でも親族でない者でもよいのです。餓鬼たちが感謝いたしますならば，それは彼らに役立つのです」(No. 11) という個所による。このうち傍線部分は原語で anumodanti と言い，この語の名詞形の「感謝」(anumodanā) は今日のスリランカでも anumōdan といって，*Vin*. Ⅱ. 212 などに見られるように普通は「布施された比丘の感謝」を示す言葉である。ところが，ここで餓鬼

が「感謝する」というように使用されていることは注目されてよい。cf. Richard F. Gombrich: *Precept and Practice—Traditional Buddhism in the Rural Highlands of Ceylon*— Oxford 1971 p. 227

10）セイロン（現スリランカ）における餓鬼（pretayā）については、yakā, holman などと共に稿を改めて論じることにしたい。